

【全体概要】

現在は、避難所により環境面に格差があるものの、目の前の生活環境を整えることが優先されている状況であった。特に地域の特色として高齢者が多く、補聴器や眼鏡、義歯、杖の紛失、ベッドがないために起き上がりが困難で ADL が低下するなどの生活全般における支障が全体的に問題となっており、介護面のニーズが高かった。医療から生活へと被災者のニーズがシフトされてきている時期にあった。精神医療に関しては、市内の精神科病院外来が再開し、患者の手元にはほぼ通常通りの薬剤がほぼ整いつつあった。市職員、私立病院職員、公務員の疲労の深刻さから相談体制を早急に整えることの必要性が東北大医師より申し送られていたが、こちらは保健所の要請によりこころのケアチームが介入していた。今後は要請に応じ、連携に応じた形で入ることが望ましいとされ、今回はタッチしていない。こころのケアチーム、ジャパンハート、東北大・協力大学連合チームの大きく3つの団体が精神医療チームとして存在しているが、連携はとれていない。今後の連携体制を整えることが課題であり、4月5日(火)にDMATのリーダーと保健所所長の間で情報交換が行われることとなっている。

【被災者の状況】

全体的には「つらいが仕方ない」と割り切る言葉が多く被災者から聞かれたこと、むしろこちらを気遣う態度が印象的であり、大半は自ら前進しつつあるようであった。元々精神障害(今回は統合失調症、双極性障害、認知症)を抱えている者が、一時的に内服薬が中断されたり、地震や津波の被害、その後の避難生活に伴う膨大なストレスにより症状の悪化をきたしていた。また、元々精神疾患の既往のない者でも、不眠や不安の訴えが多かった。こちらから聞かなくても、被災者自ら堰を切ったように話す被災者が時々おり、そこに周囲の者が自然に入り各々の体験を語り出す場面があった。避難所であれば、そうなりやすい環境にあるが、中には避難所から離れたところに避難している者もお話しを求めている。こういったことから、今後、被災者同士が自ら支え合う場として、話ができる場を設定する支援が必要と思われた。

【看護師の活動】

「こころの診察」(土曜日・月曜日の各々午前中)や往診については、医師に看護師が同行、補助する形をとり、その他の空いた時間は、看護師単独で避難所内の保健師やDMAT全体ミーティングをとおしてニーズを拾い上げ(朝・夕2回行われ、夕方に各避難所から報告や要請がある)、そこに応じる動きをとった。

【今後の活動】

K-WAVE内「こころの診察」は今後もしばらく継続される予定である。K-WAVEは1200名を収容する気仙沼市で最大の避難所であり、今後4月21日に学校が再開されるにあたり、ますます被災者が集まる可能性が高い。ここにおける医師の診察補助の継続とともに保健師と連携して精神ケアのニーズを把握し直接的なケアを行うとともに、保健師の相談に応じることが必要である。職員や子どものメンタルヘルスの支援については、ニーズが高まっていることが明らかであるが、長期的な介入が予測され、上層部にこころのケアチームとの調整をとってもらい、必要に応じて連携して組織的に関与することが望ましい。